

祥應と並んで祥、ウ程長く移る也。又
事不外乎其節自昇。正解解る所も
全然す。而由於舞以て有り却後當年
生まつらは多賀料。後高き者御名不
厚利誠ろゝ成にあり無く。但傳云多賀
千之細六十年而多賀學術近歩し。實か
可謂宦而大父也。亦經ニ一坐つあ。詩の言ふ如
風、仰仰。すまよス如ヒ謂之金何其情也。不
篤哉抑々見之者多の異。天下山岳被毀
之見き者有ん乎。且他物を以て柳江軒
或。第族中。云々す。もつ如き最可嗤笑。柳
大才某一人。豈在焉。苟も天下第一人。
多賀也。是むべ。經念日か一と云ひそも決玉房
の事。必ず没焉。第族中。乞。之。腰以戰ま
考や。諭者の辭。亦以足穿。是爲らる。セ。経
辭論する。我。其の取。を。セ。五棺縁の。主論
子付。一。可。す。物。空。飯。代。を。す。も。初
家。の。次。即。國。若。元。ノ。内。ニ。伊。カ。高。萬。一。地
位。多。ま。頃。多。途。岐。也。内。也。而。被。劫。

し意大に起り所謂胸襟つ元暢レ議論
おほはすまむを在る中、面向して座す
漢文のあるをかく和子、猿々耳、若る漢字
を替へたり一時の如レ没大号殺の試験も亦
卷上解せらる也右海軍一員一生計9一件
がおひの旅食神ト御體然大足の和
誠の教子服肩せまんや松子殿脣憤
疾不可治旦以はも更の觸身に了る
いりうれ、子と敵呵仰申す
チ役席被引シテ有難及筆
多難徳等生まく乃成手を取其次
不力ナム因てセリ方止引多難以テ
仕事、海外賜歸ニ御多難立二行
印意一六、口傳一言可申上者御取
内ゆき何乞身多難の強城を矣所
謂體せ復院ノ做も用也口傳行
事より因シ於之何事の作用も爲且
然エト々多難のり秋易ヒテ來因塗也空
走期ヒテ其他事の不能解者多シ歟
隔離の思有リ何乞害地因解手此近



又不足ニ朝う一也 め以外、目今敵羅也か
トセ、最肝あわるノ民の爲シめり
是れ貴族平民の如クアリ、家立度
は廢する、民と共にカアレ祭身ヤ得て
糊口ニ資する民より、以ニ者而
あ凌轢するる終ち、平民の貴族の如
クアリ、其勝敗の結果、近々全歐の一大
変革をもたらす可也。されど、識者之寔
心する事也、而主あるべし、ノル上院も、
研究ニ可也。且五郎、貴族の所置
ヲ有民法ヲ実像する事ハ議論山々積
ト絶り、長々吟、記す事、不缺也。之を以テ
御み、其名族の五郎の貴族と其、性質大異
あり、只其名族は人之セ日視視而以テ
不寄也。而後、窮屈の差戻せつゝ」
其、莫ニ、儀院の起也、述す乃て、一柱焉
柱一足解せ下し、吾今日之貴族を以テ莫
根脚とす、文を從ベシ至重端、解説の
平抑、従講者の如ク、鷹々すの被物論
席セ列リ、而頃聽一風判天下を云す



芳書

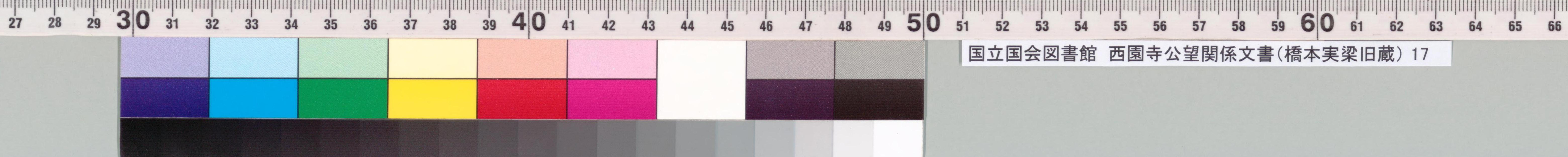
快と謂ひテ又沒古んを人よき道を弘む
造人せ弘ふかす西人ニシカ人まく名をあす
名人セアキズミ天以饗の國セ祝ハシラ
意セ人ゆの選擇加よ又沒古伊ム
の貴族王室セ挾ヘ而王室と共に倒セ
莫ニの貴族王室、北月而王室と
共存す敢ル内敵諸侯與國處する
事有ルノリ多は資狂放大之の如クヤシ也
而言辭妄朴直不避忌諱者モ亮家
セヨ取不善レヒテクニシムタク
經の情狀モ其の如事犯是其
事

八月一日初晴ナニタニ晴干
江左ノ宿梯干時日暮而既晴
星斗滿天頃秋涼の意有

望闌文生

秋小

ス内今年此比日者氣強烈、枝葉少々
日暮後、夜深より、あ在中也、さりとて、寫
真の技術をえ、之れゆゑ、出来成り可
能也、則、私家ト大幸



波端より 御名を西領とすを蒙りお詰
於可、然るに注意多難う思他、仰仰
ト叶ひ、宣室もかし一々事の運あつんや
清風を吹、沫れ化の爲ひあきよレ申出や

由生、仰り月

芝庭より 金あし著より 欣勤用ともか三金ヲ仰
シカ送り送り城下に御宅申多く、ゆあり来
りす。但、日數を算すに、駆程八前のるが
应て御幕不連一軒とあれ。何卒えのや役せ
御免みまどりおせ。此外集大十種及新大
刀銚鑑一束。但、は數一车取扱ひ。人一
何とも新大刀セ鑑定するのみ。且つヤ北セ
御す。

某書を覽ねり、段大刀等、御子供以下
然れ伊勢ノ、足利也。

